

新しいのちを育む



なかよし保育園

新しいのちを育む



お腹の中で育まれる母子関係

赤ちゃんが生まれると、当たり前ですが、お母さんと赤ちゃんは母子関係になります。では、未だこの世に生まれていない妊娠中のお母さんと胎内の赤ちゃんとの関係はどのようなものでしょう。

前はよく解らず推測するより他ありませんでした。それが最近の出生前医学の発達ではっきりと解ってきました。胎生期にも出生後のような綿密な母子関係が存在する、ということです。

お腹の赤ちゃんが動き出すと、お母さんの方には可愛さ、愛おしさと言った心情が湧いてくる。そう云った母親の情は別として、二十年位前までは「胎生期の母子関係」という言葉等耳にもしななかったが、今日では実は確かな母子関係があるのだということがはっきりしてきました。

胎内の赤ちゃんを調べる

胎内の赤ちゃんがどのようにして育てているか、色々な事が解っております。嘗ては超音波を、現代ではMRI等を使って、赤ちゃんがどんな表情をしているかということまで、ブラウン管に映して見られるようになりました。お母さんが生理的にどうなった時赤ちゃんはどうなるかということも、かなり正確に判るのです。

テレビカメラとマイクを持って、子宮の中にインタビューに行っているわけではありませんし、又もしそれが可能だったとしても赤ちゃんは質問に答えてくれませんが、現代の医学ではあらゆる技術・方法のもとに相当正確に、しかも豊富に、赤ちゃんの状態を調べています。

様々な動きや表情を調べていると、楽しいとき、快い時にはどんな身体の動きをするのか、逆に不快な時、苦しい時はどうかといったことが判ってきます。同時にまた、その時の心拍、脳波なども測定や検査をすることができます。人の情緒的な動きは、快不快の他、より分化した不安、悲しみ、恐怖、怒り、喜びと様々ですが、お母さん

のそれぞれの状態下における胎内の赤ちゃんの様子が、様々に掴める訳です。

例えば、このような実験もありました。胎内の羊水の中に甘味を少し加えてやる。甘味が増えると、赤ちゃんは笑顔を作って喜んだ表情をして羊水をよく飲むそうです。手足をバタバタさせて嬉しそうにするのです。逆に、苦く嫌な味を入れてやると、顔をしかめて手足を突っ張るようにして怒るのです。このように、お母さんの体調や心理的な夫々の状態の中で、母親の情緒的な反応、生理的な反応というのを、見届けているのです。そのような臨床科学的なデータを積み重ねて、胎児と母親の関係について、より正確な、綿密な知識が蓄積されています。

そこで、胎内の赤ちゃんはどんな時気分がよくて、どんな時気分を悪くするのか、ということになります。研究の結果、お母さんが安らかにしているとき、お母さんが赤ちゃんのことを考えてくれているときは、赤ちゃんもとてもいい顔をして安らかな状態にあることが分かってきました。お母さんが不快な時は、赤ちゃんも嫌な気分になり、しかめ面をする。お母さんの関心が赤ちゃん以外のことに移っていると、赤ちゃんは動きも少ないし表情も乏しく、ぼんやりしていることが多いのです。

動物を怒らせる化学物質

カテコールアミンという化学物質があります。神経と神経の繋がりを密接にするホルモンの一種で、特に自律神経系統の伝達作用の役目を担っています。

このカテコールアミンは、我々がひどく不安になったときや、恐怖に襲われたとき、或は怒りに駆られた時に、体の中に急激に増え続ける物質です。どんどん増えます。すると自律神経系統のある回路が活発に動きだし、まず血圧を上げます。瞳孔を広げ、心拍数をまし、さらに汗が出ます。これは拳や脇の下に出る「手に汗にぎる」精神性発汗こがしといって体温を無関係に発汗を促す作用をするからです。その他いろいろ

な作用もしますが、そのカテコールアミンという物質が、体の中にワッと増えます。

一方、動物を使つてのこんな実験もあります。動物も怒らせるとカテコールアミンなどが増えます。怒った動物の血中に増えたその化学物質を生成したものを、機嫌よく遊んでいる他の動物に注射してやると、これが立派に怒りだすのです。

不安に怯えている動物から生成したカテコールアミンをはじめとする、生体内化学物質を、他の動物に注射すると、これはちゃんと不安に襲われる。怒りは怒り、不安は不安と見事に作用するところは、誠に微妙と言わざるを得ません。これは人間に注射しても同じ結果を齎すのです。

我々も理由の判らぬ不安に襲われたり、僅かの事で腹を立てたりすることがあります。不安神経症の人はいつも不安に陥っています。これはちょっとしたことでカテコールアミン等が増え易い身体的生理状態になっているわけです。何かの理由で怒りだすとカテコールアミンが増える。逆に、カテコールアミンを入れて増やしてやると理由がなくても怒り出すという訳です。



母親が怒ると胎児も怒る

このカテコールアミンなどのホルモン物質は、母親の胎内の血中に、ある濃度以上に増加する時、胎盤を通過して赤ちゃんの方にもいくという、非常に大事なことが分かってきました。

お母さんが怒りや不安に襲われると、カテコールアミンを中心とする何種類かの物質が血中濃度を上げます。お母さんの心拍数は高くなり、血圧は上がり、消化器の機能も悪くなります。そのとき同じ物質が胎盤を通過して赤ちゃんにも届くのです。お母さんが悲しめば、胎内の赤ちゃんも当然悲しむことになります。お母さんが不安になれば、赤ちゃんも不安に震えています。その反応は、先ほどの動物実験の話の、怒りは怒り、不安は不安と微妙に作用するのと同じです。カテコールアミンは明らかになっている物質の代表的なものですが、まだまだ沢山の物質があって、全部は解っておりません。しかし、数種類は明らかにな

っていて、それらの物質がそれぞれのケースに応じて、あるものは増え、あるものは減って作用しているようです。

これ等の例から確実に云える事の一つは、カテコールアミンを中心とした伝達物質のホルモンが、妊娠中の母親の胎内の生理的状态を変えらるということ。胎児の感受性がホルモンの刺激される一ホルモンだけでなくそれ以外の化学物質によつても色々刺激されておりますが、ホルモンが大きな役割を果たしているということだけはこれまでの研究で確かになったことです。

人間の胎盤は極く限られた物質しか通す事はしません。がカテコールアミンが胎盤をなぜ通過するようになっているのか。言い換えると、お母さんの気持ちと胎内の赤ちゃんの気持ちが完全に一致するような仕組みになっているのが、不思議で、神の摂理としか言いようがない、と思わざるを得ません。そして「母子関係」という強い絆と、その言葉の持つ深遠な意味について、改めて考えさせられます。

お母さんの胎内で育つ生活リズム

母体から胎児への伝わり方の見事さというものは、更にこんなことに表れております。赤ちゃんは胎内で、お母さんの心臓や脈拍のリズムや音です。謂わば、バックグラウンドミュージックのようなものです。

そのリズムが、赤ちゃんの生活リズムとして定着する。お母さんと全く同じとは限りませんが、その二倍のゆっくりしたリズムとか、お母さんの心臓のリズムを基盤としたリズムが好きなのです。生活のリズムだけではない、感覚のリズム、感受生のリズムを作るうえで、極めて大きな基礎をなしていることが解っています。心臓の病気があったりして、不整脈のお母さんは、胎児に情緒的な不安定を来たし易いとも言われております、心配ごとがあれば頻尿や不整脈になりがちですから、妊娠の長期の心配ごとはそういう意味からも胎児に決して好い影響を与えません。

徐脈、頻脈というのがあります。ゆっくりした脈拍の人、忙しい脈拍の人、更にそ

の中間程度の人もあります。夫々のお母さんから生まれた赤ちゃんを追跡調査してみると、その傾向がはっきり出ている。ゆっくりしたお母さんの子供はどちらかというところ、或はおっとりした性質や行動特徴を持ち易いのです。或はまたその心拍リズムの最大公約数または最小公倍数などのリズムを好むということになります。

ですから、あなたの好む音楽や生活のリズムは、何十年か前にお母さんの胎内でもらったものといえるかもしれません。赤ちゃんにとってお母さんの心臓の動きというのは、このように非常に大事なものです。

生活リズムといえば、朝寝坊のお母さんの子供は、やはり朝寝になる傾向があります。お母さんが起きていると赤ちゃんも起きています。お母さんが起きて何かやっていると、赤ちゃんに伝わる刺激も色々あるし、外の音も聞こえる。お母さんが眠ると赤ちゃんも眠る。夜更かしのお母さんのお腹の赤ちゃんは、やはり寝つきが悪くなります。早起きのお母さんから生まれた赤ちゃんは、早起きの傾向があります。つまり胎生期のリズムは、生まれたあとの習慣にも影響しやすいといえます。

お母さんと胎児の関係は、そのメカニズムの全部が解明され、科学的に実証されているわけではありません。が、色々な臨床データや調査事実をもとにした間接的な証明などからみて、妊娠中のお母さんはどんな状態で過ごせばよいか、胎児にとって、お母さんの子宮の中はこの世の全て、宇宙そのものです。“宇宙”「胎児号」がどんな気持ちで過ごせばよいかということが、色々解ってきました。それは、できるだけ平穏に楽しく、そして早寝早起き、規則的で心音のリズムも安定した生活です。更に何よりも、情緒的に安定し、幸福な状態で、いつもお腹の赤ちゃんを思いながら過ごすということなのです。

母親の不安の影響

母子の情緒的安定は大切なことですので、もっと詳しく考えてみましょう。お母さんの不安がよくない、とはどんな不安が

良くないかということ、お母さんが自分で解決できない様な性質の不安、そして長く続く不安です。大体、不安のない日常生活などある筈がない。お母さんの不安と言えば、大変な量と種類がある。

そこで、例えば上の子が一日だけ行方不明になったというような事例は、ショックの度合は強烈ですが、あまり影響は与えないらしいことがわかっています。また、夫が山で遭難したかも知れないとか。事故の飛行機に乗っていたのではないかというような、つまり短期の物すごい不安、そんな不安に妊娠中に襲われたお母さんの子に、明らかに問題を残しているという例は発見されていないことが分かりました。

一方、家業が倒産するかも知れない。夫が失職するかも知れない、夫に別の女性ができたらしいといった、長期的に毎日続く不安、然も自分の力では解決のしようがない性質の不安、そういうことはいけません。

一週間や短期間で終る不安は、相当強烈なものでも、後遺症状を残したという証明は出いせん。胎児の感受性は、お母さんのホルモンで刺激されて作動し、お母さんの考えや感情をかなり正確に知覚しているらしい。感じているらしいのです。お母さんの不安は胎児の感受性にキャッチされる。お母さんが強い不安に襲われると、胎児も顔をしかめ手足をバタつかせ、心音が激しくなったりして不安に苦しみます。しかし、それが短期間で終ると、赤ちゃんの記憶装置の中にコピーされるころまではいかない。もしこれが長期的に毎日続くと、しっかりコピーされるようです。一時的に強烈なものでもなくとも、もっと穏やかな不安でも、長く続くのがいけない。こうしてみると、夫の浮気などは一番タチが悪いかもしれません。お母さんにとって夫の浮気は、片時も頭を離れない重大問題ですし、長期にわたる不安ですから。

胎児は記憶し考える

では、赤ちゃんは何時頃から記憶したり考えたりし始めるのかということ、七～八か月位とされています。その前の段階でも

色々な不安はあるわけですが、記憶されるころまではいかない。胎生の七～八ヶ月になると、物をはっきり記憶する。そして考え始めるのです。意識的に手足を動かそうとするということが、証明されています。

七～八ヶ月になると、解剖学的には殆ど新生児と変わらない神経回路が脳の中に出来上がっております。外からのメッセージを正確に脳に伝えることもできます。今は胎児の脳波が測定できます。外界からのメッセージをキャッチした胎児の脳は、脳波に変化を出します。又、自分の脳から信号を有る程度、手足に意識的に伝えることもできる。これが胎生七～八ヶ月です。

そういう意味では、胎児にはっきり意識が芽生えているといえます。私達には通常、お母さんの胎内の頃の記憶というのはありません。ところが、専門家が世界中を捜すと胎生七～八ヶ月ごろの記憶や出産時の体験の記憶を持っている人もいます。



胎児の好きな音楽、嫌いな音楽

胎児はロックが嫌いです。それからベートーベンも。外からのメッセージをキャッチするのと同じく、幼児は音楽の好き嫌いをはっきり示すわけです。

「運命」などは少しも快く響いていないようです。嫌いと言うことは、お母さんが不安や恐怖を感じたときに近い反応を手足の動きとか表情とかの反応をベートーベンやロックの音楽には示すのだそうです。

モーツァルトやバロック音楽、ビバルディ等が好きだと言われます。この時は、お母さんが平穏で安定した状態の時に近い反応を示します。ベートーベンばかり聞かせて生まれた赤ちゃんの比較、そういう研究は残念ながらありません。

何故そうなのか、又そういうことの影響はどうかについては、まだ実証はされておられません。しかし、赤ちゃんが外の音楽というメッセージを受け取っていること、それに対して気分が良いか悪いかのサインを送っていること、そういう観察のデータは容易に取得できるわけです。そんな研究までされているという一例です。特にビバ

ルディが良いと言っている学者もいます。



お腹の中でストレスを受ける赤ちゃん

次に申し上げたい事は、母親の感情が胎児の自己形成に影響する点についてです。これは今まで述べてきた延長線上にある、或は重複するかも知れませんが、大事な問題ですのでもう少し考えて見ましょう。

お母さんが常時不安、不満、不機嫌になっている。そして、お腹の赤ちゃん以外のことに関心を奪われていると、赤ちゃんはどうなるか。

生まれた後、新生児期から一種の「抑うつ」に近い状態になるそうです。そして幼児期になっても表情の乏しい、無感動な子になりやすい。さらに思春期に至っても、注意力の散漫な人が多いというのです。

妊娠中のお母さんが、不快、怒りといった情緒的にマイナスの状態を何か月も続ける。怒りばかりではなく、何か心配ごととか欲求不満など、或は自分自身の趣味や遊びなど、要するに赤ちゃん以外の別のことに関心が集中し過ぎたりしても、赤ちゃんにはよくないのです。これは胎児に対する、精神的サポートの放棄の状態と言える訳です。胎児の側からすれば、支えを失った愛情喪失の状態、見捨てられた状態と同じなのです。

このような胎生期を過ぎざるを得なかった赤ちゃんは、お腹の中で既に一種独特の無表情な、非常に表情の乏しい顔です。こういう領域の研究者は、そういう事例の記録を集めたビデオカセットがあります。はっきり、表情の乏しい胎児というのがあります。胎児の段階で既に抑うつ状態になっているのではないかと思われるほどです。謂わば、情緒的な問題児の予備軍でもあるかのようです。

このような胎児が多くなる傾向が、最近、世界的にも増えているそうです。それも経済が成長し高度な発展を遂げた国、イギリス、フランス、西ドイツ、アメリカ、日本等に多くなっています。アメリカのハーバード大学のバーニー教授も、小児期の抑うつ

つ病は発展途上国にはない病気であり、先進国では今後、精神医学の重要な領域になるだろうとさえ示唆しています。小学校の終り頃まで追跡調査していきますと、注意力の散漫な子というのは、新生児期に抑鬱状態にあり、幼児期を無感動な状態で過した子であると、専門家達ははっきり指摘しています。

妊娠中に父親の死が及ぼす影響

お父さんの死後に生まれた子供も、問題が起き易いようですね。つまりお母さんが妊娠中に、お父さんがなくなった子どもですね。これはとても大事な事かと考えられます。生まれた後に父が死んだ場合と、胎生期に死んだ場合とでは、決定的な違いがあります。

胎生期にお父さんがなくなると、お母さんは大きなショックを受けます。そのお母さんのショックの影響を胎児が受けます。生まれた後で、亡くなっても、お母さんのショックは同じ位あるわけで、勿論その影響を赤ちゃんも受ける。

ところが、その影響は前者の方が遥かに大きいのです。比較にならない位大きい影響です。ということは、子供に対する母親の不安の影響というものは、生まれてからより、妊娠中の方がうんと強く伝わるということです。

これは、それまで多くの小児科臨床医が想像していたことと逆でした。子供に対するお母さんの精神的、情緒的状态というのは、生まれた後より生まれる前の方が強く影響することがある、これが今日の知識です。そうしますと、生まれてからどうこうというよりも、妊娠した胎児の時から一生懸命育てることの重要性が解ります。

胎生期に父親が死ぬ。父の死というのは、最悪ですね。それは生まれてからでも同じです。ところが、生まれた後の死は、お母さんのショックは子供に心理的にしか伝わっていきません。胎生期においては、生理的にも心理的にも伝わるのです。通常、生後の赤ちゃんは感受性が鋭く、お母さんの影響を敏感に受けるだろうと考えがちですが、意外にそうではないのです。生物

学的、生理学的に伝わる物の大きさを、改めて我々も教えられます。

付け加えますと、この父親の死は子供の統合失調症の発病率に表れているそうです。思春期になってから統合失調症になる頻度は胎生期と出産後の父の死では桁一つ位の違いがあるということです。だから、胎生期に父を失うということは非常に恐ろしいことです。それほど強い衝撃を、お母さんが長期に亘って持続して受けるからです。



お母さんの不安が身体の発達に及ぼす影響

持続する衝撃の影響の大きさはお解かり頂けたと思います。以上の事は精神的発達に対する影響ですが、身体の発育にも影響を与えます。

妊娠中のお母さんが非常に空腹の状態、飢餓の状態を過ごして、栄養失調に陥る。生まれる赤ちゃんは小さく育つかというと、そうではなくて肥満に成り易いのです。ということは、お母さんが空腹だと、低血糖だと低栄養の状態になる。低血糖、低栄養状態という信号が、お母さんの間脳にどンドン働く。そこからある信号物質が出る。その物質が胎盤を通過して赤ちゃんに行きます。だから赤ちゃんの間脳も、低血糖、低栄養の信号を受け続けるのです。そういうことを体が覚えこむわけです。だから、食事を貪ろうとする神経が発達してしまうのです。そして、生まれた後も過食になるのです。

歴史が教える例として、ドイツがオランダに食物の輸出を禁止した時期がありました。その為、オランダは2~3年の間、食糧不足に陥りました。そして空腹、低栄養の妊娠が多くなりました。ほんの2~3年の事だそうですが、この時期に生まれた赤ちゃんが、みな肥満児になったということです。お母さんが空腹で、食べ物が欲しい、食べたいと考え続けていると、それがちゃんと胎児に伝わっていたのです。胎内に居る時だけでなく、生まれた後もその記憶が残っていて、ミルクをどンドン飲んだということです。

お母さんの体の状態、精神状態が胎児に伝わるメカニズムは、全部は解っていませんが、実に見事に伝わっているということはお解かり頂けるでしょう。

胎生期に形成される母子関係

人間の脳には、生命を維持する為に必要な、色々な中枢があります。赤ちゃんの中枢があり、生きて行く上で必要なことを記録しながら、成長していくのです。その記録＝コピーは、胎生期に始まり、出生後も続けられるのですが、どのようになされるかと言うと、まず胎生期にはお母さんが作る物質で刺激され、それを知覚して、コピーされるということです。赤ちゃんは、お母さんの出す情報をコピーされた状態で、生まれてくる訳です。そういう意味では、胎児というのはコンピュータに例えると、絶えずプログラムを作り直されている、といえます。

こうして、生まれた後の性格、行動、物の考え方まで、その基本的なものは中枢神経の中に刻み込まれながら、胎児期を過ごしているわけです。そして7～8ヵ月になると、はっきりものを知覚し、考え、意識する。6ヶ月位から一種の自我構造が出来上がり、漠然とした感覚を情緒に変えることもできるといわれています。お母さんを通して入ってくる内外の情報・メッセージによって、自分というものを徐々に創り始めている。つまり、個人対個人の基本的な母子関係が形成されるわけです。遅くとも6ヵ月頃には、はっきりとこうした関係になっているのだそうです。先程の空腹、飢餓ということでは、お母さんの生理状態を、一番強く影響を受けるのは、3ヵ月から4ヵ月、乃至4ヵ月半頃とされています。人間として基本的な食に関する事柄が、3ヶ月から5ヶ月位の間コピーされているのです。

その頃は、情緒や自我の形成が始まっているというのではなく、未だ証明出来ずにいるということかも知れません。或は、ある種の感じというのは、始まっているかもしれません。遅くとも6ヵ月という事は、もっと早くからだと考えた方がよいのか

もしれません。

これも、MRIなどハイテクの技術を用いて、この十年余りの間の研究で明らかになってきたことですが、特にイタリアを中心にヨーロッパの各地で、産まれたばかりの新生児の脳の働きを調べられております。

その研究の成果によりますと、新しい知見が次々に出てきました。かつては生まれたばかりの赤ちゃんは、殆ど何も見たり聞いたり考えたりしていないと思われていましたが、とんでもない事でした。

赤ちゃんの脳は、生まれた直後に、既に、お母さんが話しかけていたイタリア語にだけ、特異的によく反応しているのです。MRIの画像に、お母さんが話しかけるイタリア語にだけ、赤ちゃんの脳が見事に働いている様子が映し出されるのです。お父さんの話しかけや、医療スタッフの話しかけには、赤ちゃんの脳は殆ど反応しようとしません。生まれた直後に、既に赤ちゃんのほうでも、お母さんとの特別な絆をしっかりと感じているのです。

実験的にお母さんに、俄か勉強でフランス語やドイツ語を覚えて語りかけてもらっても、赤ちゃんは母国語のイタリア語のようには、反応しないのです。一年近くお母さんのお腹の中にいた経験が、どれほど大きな意味をもっていることかを、改めて考えさせられる事実です。西洋の研究者の中には、昔の日本のように出生とともに一歳と考える“数え年”の考え方を、本当は合理的だと推奨する人もいます。

それはまた、もっと古くから知られていることですが、主に東ヨーロッパの研究者によって明らかにされてきました。生まれた後の赤ちゃんは、お母さんが妊娠中から歌っていた歌を子守歌にして育てられることを、大きな安らぎにするというのです。

心理学者の依田明教授は「妊娠したお母さんはお腹の赤ちゃんの為の主題歌を大切に口ずさみながら、既に妊娠中から育児をしているような気持ちで過ぎて貰いたい」と書いております。

このように、赤ちゃんや子供にとって、お母さんは胎生期から既にこんなに大きな意味や役割があることを実感し、そのこ

とを、大きな誇りにしてほしいと思います。



産科学の進歩

胎生期医学の進歩のお蔭で、今まで解明されてきただけでも、妊娠中の母子関係が如何に重要なものであるか改めて解ってきたわけですが、もう十分理解して頂けたか思います。

次は周産期、つまり出産直後の母子関係です。赤ちゃんが生まれると、子育てが始まります。子育ての重要性は、皆さん十分に解っていらっしゃると思います。しかし、どこがどんなふうに重要なのかというところが、問題なのです。これまでは、「胎生期」として妊娠中の時期の問題を考え、この後では「乳児期」として生まれた後の赤ちゃん時代を捉えています。その間に、こうして特に「出生時」の時期を設けて考える必要がある。というところにも、近年の新たな研究の成果があるのです。

昭和20年～30年代中頃までは、出産における母子の死亡率というのは、かなり高いものでした。それが今では、大多数の出産が本当に安全にできて、母子共に健康な状態で産後を経過できるようになりました。妊産婦の産褥期の合併症もなくなりましたし、また行き届いた設備の中で新生児もよく管理されて、死亡率は極端に減りました。

これは確かに、現代産科学の大きな進歩であり勝利です。産科学の誇るに足る勝利だと考えます。産院では、赤ちゃんが生まれると、ヘソの緒を処理し、胎盤の処置をし、それから普通の場合、「元気な赤しゃんですよ」「男の子ですよ」「いい赤ちゃんですよ」と、お母さんに伝えます。それから産湯を使い、産着を着せた赤ちゃんをお母さんに見せます。そして新生児室に連れていきます。

後は一日に数回、決められた時間に授乳のためにお母さんの所へ連れてきます。赤ちゃんは看護婦さんに抱かれて、お母さんと新生児室の間を往復する。その他の大部分の時間、赤ちゃんは科学的に万全な新生児室内の管理の下で見事に育児され、お母さんの方は十分な安静がとれて産後の回

復も早いというのです。お母さんは退院時に始めて自分のもとに赤ちゃんを引き取って、抱き抱えて帰っていく、といったパターンでしょう。

こうした現代産科学の方法のお蔭で、妊産婦も新生児も色々な障害が克服されて、死亡率や合併症が飛躍的に改善されました。ところが、この方法に疑問が持たれ始めたのです。



新生児の母子接触

生まれた直後からお母さんと赤ちゃんは、もっと密接に触れあっていることが大切なのではないか、という考えです。経験に裏打ちされた直感力というのか、そんな疑問を抱いた心理学者がいたのです。産科医や新生児医療の専門家達と共同して、大きな産院で妊婦の了解をとって実験を始めたのでした。

生まれた直後からの触れ合いと言いましたが、この「直後」というのが大事な問題です。どういうことをするかというと、生まれると直ぐ、お母さんは赤ちゃんを抱っこする。胎脂という脂肪分や産道の分泌物や血液も付いたまま、胎盤もヘソの緒も引き摺ったままの赤ちゃんを抱っこする。決して産湯など使って綺麗になった赤ちゃんではありません。勿論、正常な分娩においてですが、異常分娩の場合の話は別です。お母さんは、文字どおり生まれたままの赤ちゃんをそのまま抱っこし、そのあとでヘソの緒、胎盤、産湯などの処置をして、もう一度きれいになったところであらためて抱っこしてから、赤ちゃんは、新生児室に連れていかれるわけです。

お母さんと自分達のベッドに帰っていくという場合もあるといわれますが、新生児室の良さや重要性もあるでしょう。これは勿論大事なことです。新生児室の科学的に管理された育児の時間は大切ですが、この実験では、授乳などでお母さんの所に連れてこられたとき、従来の方の決められた時間以上に、長くお母さんの傍に置くようにする。事情が許せば、というのは赤ちゃんが健康で、お母さんの方の健康も心配がなければ、授乳以外の時間でもできるだ

け回数を多く、長い時間、お母さんの所に連れてくる。オシッコをすれば、お母さんにオムツの取り換えをしてもらう。

お母さんにしてみれば、従来の方式に比べて忙しくなります。安静時間も短くなります。このような試みを、当初は同意した母親にのみやっておりましたが、後述するように、予想した以上の成果が認められてからは、予め妊産婦に同意を得ておいて、偶数日に出産日がめぐってきた母親のグループは従来方式、奇数日出産のグループはいまお話しした新方式で実施し、退院後、初めの一年位は毎月定例の健康診断を行いながら、学校に入る六歳まで母子の種々の様態を追跡調査しました。

この貴重な研究レポートで、色々大切なことが解って参りました。生まれた直後から、赤ちゃんとの接触機会を多く重ねたグループのお母さんは、一種の育児衝動とでもいうのでしょうか。常に赤ちゃんと一緒にいようとする気持ちが強いのです。一緒にいてあれこれ面倒を見ようとする気持ちや姿勢が旺盛なのです。そして、こうして育てられた子供の方が、知能の発達が順調で、言語や情緒面での発育や生活も豊かだということが解ってきたのです。

出産直後から触れ合う意味

これまでお話しした臨床実験的な試みでは、産院から帰宅後も、一番最初の階段から、多くの家庭でその育児行動が全部カメラに納められました。赤ちゃんに対して、お母さんがどんなふうに行っているか、赤ちゃんの寝かされているベッドルームにカメラを設置して記録したのです。それと同時に、定期検診にやってくる母子をクリニックで直接観察したのです。

仮に今、偶数日出産の従来方式のお母さん達をAグループ、奇数日出産の実験的母子接触方式のお母さん達をBグループと呼ぶ事にします。

二つのグループの育児行動を観察比較すると、面白い想違があります。1ヵ月健診、2ヶ月健診という風に、母子で定期健診のために、お母さんが赤ちゃんを連れて病院にやってくる。その場合のお母さんの

育児行動をよく観察したのです。するとAグループのお母さんは一般的に、赤ちゃんをあっさり看護婦さんに預けて、ゆったりとして見えています。ところがBグループのお母さん達は、手を差し出して看護婦さんに、簡単に赤ちゃんを預けないのです。診察台に赤ちゃんを乗せるにしても、出来れば自分で載せようとする。看護婦さんに赤ちゃんを渡す場合も、診察台の所まで一緒について行く、そして自分で見て確かめる。側まで見に行くという行動がAとBでは違う。それから看護婦さんが肌着を脱がせる時も、Bグループのお母さんの方はすぐ手を出そうとするそうです。Aグループの方は安心して看護婦さんに預け、看護婦さんがしてくれるのを安心して見ている傾向が強いのです。

それからもう一つの実験的な設定ですが、体重、身長を計測する場所を衝立の向こう側に設けて、赤ちゃんを衝立の裏側に連れていく。実験として故意にそうしてみるわけですね。すると、Aグループの母親は衝立のこちらから見ている人が多い。安心してるといえば確かに安心して任せ切っている事になります。

ところがBグループの親の方は、顔を突き出してのぞこうとする例が多い。つい立の向こうまで見に行こうとするお母さんも結構います。病院、看護師を信頼せず、不安を抱いているという訳ではないのです。決してそうではない。やはり、赤ちゃんに対する関心の度合いというのが、明らかに違うのです。

Bグループでは、そういう関心の強いお母さんが35%から50%もいて、預けっぱなしではなくてすぐ見に行こうとするのだそうです。Aグループでは、赤ちゃんが泣いたりすると、見に行こうとはするのですが、Bグループは、特別なことなくても、赤ちゃんの所に行ってみようとする行動が目立つのです。それから、診察が終わりそうになると、Bグループの母親は近寄ってきて、衣類を自分で着せようとする人が多いのですが、Aグループでは、すっかり着せなおして手元に返してもらうまで待っている人が多いのだそうです。



赤ちゃんとの会話

それから、赤ちゃんに対する話しかけ、あやしといった点でも差があるのです。Bグループの方は、言葉の解らない赤ちゃんに対して、何か言葉を掛けて世話をやこうとする行動が多い。従って、赤ちゃんの言葉が出はじめると、赤ちゃんとのおしゃべりが多くなるのは当然です。そういう差異が、はっきり数量化されて結果として出ているのです。

その他、家庭に持ち込んだ固定カメラの映像や音声の分析によると、Bグループの場合のほうが、赤ちゃんが泣いてからお母さんがやってくるまでの時間が明らかに短いのです。

さらに面白いのは、子どもが少し大きくなった時期の、母子の言葉のやりとりです。子どもというのは、「なぜ?」「どうして?」を連発して親を困らせる時期があります。「どうしてお空は青いの?」「どうしてお水は冷たいの?」などは、返事のしようのない質問ですね。そういうとき、Aグループのお母さんは、「それは難しい事だから大きくなったらわかることよ」、あるいは、「神様がそうされたの」、とか何とか言って済ませる例が多いわけです。

Bグループの方は、何とか答えを工夫して、子どもに解る様に説明しようとするのです。謂うならば、言葉による接触が続くわけです。こういうことから、子供との情緒的な接触や交流も豊富になるんです。例えば、花を見て話す。単純に花が咲いている、というのでなくて、“きれいな花”だとか、“赤い花”だとか、“沢山咲いていてきれい”とか、或は、“緑の葉っぱもついているね”とか、母親が子供に向かって話す言葉にも、修飾語が沢山つくということも解っています。このように、言語表現の豊かさにも違いが出るということは、大変な事です。

これはイギリスの例ですが、お母さん達の承諾を得て、協力してもらえる限りの子供に知能テストまでやっています。学校に入る直前の、A・B両グループの子どものリサーチです。平均でIQが五も違ったと

報告されています。平均で五というのは大きな違いだと思います。大勢を対象にしての検討で、五の違いですからね。その中には心身障害児や発達遅滞の子は入っていません。これらの研究は、出産時の体験と、その直後の乳児期から母子関係との間に、非常に密接な関係があるということを証明して見せた、大がかりで貴重な研究です。

日本でも赤ちゃんを新生児室に必要以上に置かないという方式を取っている所があります。しかし、未だこうした新しい知識が普及しないので、従来方式の病院も結構多い。寧ろ産院側のサービスの意図で、赤ちゃんを新生児室に長く留めて置く。お母さんは家に帰ったらまた忙しいのだから、せめて入院中位はのんびりと静養していられっやい、というわけです。だが、それはどうもいけないのです。昔のお産は、入院もなければ、赤ちゃんのための新生児室などもなかった。お産に於ける、母子の死亡率を減らした西洋医学の科学的方式の大きな成果は、十分に認めなければいけません。昔の産婆さんによるお産の良さも改めて見直されているようなのです。この二つの方式をどのように結び付けるか、新しい科学知識の裏付けによってそのコンビネーションを図るのが、これからの産科学、新生児医学の大きな焦点といえるでしょう。



産後の母子分離

このようなことが解ってきますと、動物実験で証明することです。この実験に最も敏感に反応を示したのが、ヤギの母親。ヤギの赤ちゃんが生まれて一時間、母子の接触を断つと、母ヤギはもう子ヤギを育てないそうです。さらに、イヌ、サル、ネズミなどで、出産後どの位分離しておくか、育児がどれだけ下手になるか、或はできなくなってしまいか、種々の時間の母子分離で観察を行いデータをとったのです。動物の種類によって差はあるし、同じ種類の動物でも、個体差はあるようです。ただ、はっきり言えることは、分離が長ければ長いほど、育児は下手になります。ヤギの場合は一時間の分離で、母子関係がほぼ完全

に断絶してしまうということです。

人間は本能だけで生きているわけではなく、人間はそんな訳にはいきません。学習した力もあれば、意欲とか義務とか、そういった観念も持っています。本能的とも思える母性というものも、人間では本能ではなくて学習の結果だといわれています。

例えば、真夜中に赤ちゃんがおっぱいを欲しがって泣いても、苦にならない。うんちやオシッコに触れても何とも思わない。汚れ物も平気で手で持つ。このような赤ちゃんとの一体感、育児衝動、育児行動、要するに母性というものは、先に話しました出産体験、ないし出産直後の接触体験が、非常に大きな意味を持っているのです。その体験によって、それまでに学習されたものが大きく点火されるのだ。ということが今日の新生児医学・新生児心理学・新生児精神医学、或は産科学の共同研究で、明らかにされてきたわけです。

動物実験では、分離が長くなれば育児が下手になる。母性行動が薄れることが解りました。人間の場合も、確実にそうなるか、これは難しいところです。人間の場合、上手、下手の価値判断が単純には下せません。

けれども申し上げたいのは、出産直後から乳児期にかけての、そしてその後、幼児期や学童期を投通じて、恐らく同様に母子関係の有り方が、出産体験あるいは出産直後の体験と、極めて密接な結び付きがあり、育児行動とかは母性行動が、強いエネルギーを伴って発揮される為には出産直後から沢山母子接触することがいいのだ。ということが分かってきました。

依存体験不足は自立ができない

次の階段は、乳児がお母さんから離れて、一定の距離をおいて生活を始めて時期です。子供の成熟発達には、必ず依存から自立へという、絶対に避けて通ることの出来ない発達の順序過程があります。

依存というのは、自分で自分の欲求を解決することができないために、誰か信頼できる人に頼ることです。頼って何かと世話をもらい、面倒をみてもらって欲求を充足することです。この、依存体験を沢山し

た子、不足なくみっちり十分にした子、然もお母さんを中心とした保育環境で体験した子は、自立が早いのです。

昔から「這えば立て、立てば歩めの親心」といいます。子どもの成長を願う親心は分かりますが、同じ頃生まれたよその子より立つのが遅い、歩くのが遅いと心配することはよくありません。寧ろ早くから歩き始めるよりも、這い回っている期間が長いほうが良いのです。這い回るといって乳児期特有の運動発達の過程を十二分に体験し、味わった方が、成長過程という段階を上がる行程の中では、良いことなのです。

同じような意味で、乳児期や早期幼児期に、早くから一見自律的で我慢強そうに見える行動をとるよりも、親に多くのことを頼って、満たされて育つのがよいのです。この階段では、二段駆け上がりのようなことは許されず、踏み残しの段階があれば、それは「自立」にとってマイナスの要素となるのです。

間接的な証明として、一つ例を紹介しましょう。養護施設にも人手や保育の熱心さなど色々違いはありますが、ここに入った子供は、早い時期から身の回りのことは自分でやるように、熱心に指導されます。自分の事は自分でやる習慣を、家庭の子どもより早くから身につける。そのために、一見自立が早いように思われますが、これが実際はそうでなく、遅いのです。

指しゃぶり、爪かみ、おねしょ、その他様々な成熟や、発達行動の遅れが目立っています。又、グループを発揮できない等、社会性の確立も遅い。自立が早いように見えて、実は遅れているのです。

これは、何故かー。依存体験の不足による結果なのです。子どもの発達には、依存から自立へという過程が絶対に必要であって、それは不可避のことなのです。子供自身が望んでいるような愛され方、手のかけられ方をしなければならぬのです。

健全な発達と自立には、そのように十分な依存体験が必要なのです。



保育園・幼稚園の子の自立性

保育園の子供と幼稚園の子供の、自立性、自発性に関する調査です。園によって色々差異はありますが、日本の各地で調査・集計したもので、非常に沢山の事例が集まっています。幼稚園は園で過ごす時間が短く、また自分であれこれしなさいと言われることも少ない。保育園では自分でやりなさいと、割合早い時期から、生活行動をあれこれ指導されます。色々な事が早くから自分で出来ると言う事は、それだけ自立ができてきていることかという、決してそうではありません。

もしそうだとすると、養護施設の子どもは、一番自立的な能力を身につけるのが早いはず。いや、乳児院の子どもは更に早いことになる。スプーンを持って食べる、椅子にかける、そういうことを早くから教えこまれ、早くから身につける。しかし、これはそういう個々の動作や行為の獲得であって、必ずしも社会的な人格の形成、という意味での自立をそのまま表わすものではありません。そんなこととは別なところで、そしてもっと大事なところで、人間としての主体性を持った、人格の中身を問うような意味での発達行動としては、未熟なものを持って、自立の過程が十分に行われていない子どもに育てている心配があるのです。

子供の成熟や発達には、このようにして依存から自立へというプロセスが、どうしても必要です。このことは親にとっても、産休明けからこのようなお子さんを預かる保育園の保育士にとっても極めて大切なことです。肝に銘じて於いておくべきです。

自立へ向けて「絶対依存」の持つ意味

この依存から自立への過程の中で、特に大事なものは最初の一年です。何故最初の一年がそんなに大事かという、この時期に赤ちゃんは自分で自分の欲求を満たすことが何も出来ないからです。自分では何もできない、というのは完全に無力な状態です。

この時期は、絶対依存の時期、完全依存

の時期、といわれています。この時期の赤ちゃんは、自分では何も出来ないから、周囲の誰かに全てのことをしてもらわなければならないのです。それをしてあげる最高の適任者はお母さんです。

この時期、赤ちゃんのこれをして欲しい、あれをして貰いたいという欲求を、すぐその場でお母さんが叶えてやる一つまり、自分の欲求が100%に近い状態で充足されるような育児や保育をされた赤ちゃんは、一番自立への歩みがしっかりして早いでしょう。実際には100%ということは不可能なことでしょうが、そういうことなのです。

何故かと言いますと、先程からいうように、この時期の子どもは無力だから、周りの人に依存し、色々な事をしてもらい、生活をしなくてははいけない。そういう状態の時に、自分の欲求が全て叶えられたら、周りの世界に対する信頼は非常に強いものになります。その信頼の強さが子供をしっかり自立へと導いていくのです。

信頼から自信、自立へ

このことをもっと詳しく説明しましょう。子どもというのは、周囲に対する信頼感を基盤に自立していきます。周囲に対する信頼感なしには、自立が出来ないのです。無力な子供は自分では何もできない。だから、誰かにやってもらわなければいけない。ところが自分の期待や欲求は、周りの人はそう簡単に叶えてくれない。自分でできないにも拘らず、誰もや^{わめ}ってくれない。もし仮に泣いて訴えても、喚いて要求しても、自分の欲求を満たしてくれる人がいない。そういう初期体験によって、周囲に対する不信感が生じてきます。同時に、あれこれ要求しても親や大人に受け容れられなければ、一種の無力感が育っていきかねません。決して躑躅や忍耐強くなど美名の下では、その反対の結果になりかねません。自分に対する無力感を体験することになるのです。周囲に対する不信感、イコール、自分に対する無力感。これが逆に、周囲に対する信頼感が強ければ強いほど、自分に対する自信を育むことになる。この自信が、自立していくために基本的に必要なことで

す。

赤ちゃんには欲求が色々あります。オムツが濡れて気持ちが悪い、取り替えて欲しい。お腹がすいた、オッパイが欲しい。退屈だからあやしてほしい。寝入りばな寂しいから側に添い寝してほしい。目が醒めた時、不安に襲われたとき、すぐ側に来てあやして欲しい……。

子どもにも個性があります。一度に沢山オッパイを飲むことができ、長い時間機嫌よくしていることができる子、少しずつ何回も授乳を求める子、寝入りばなに不安を感じ易い子、目覚めの時不安を覚える子、オムツの濡れが人一倍気になる子、様々です。そして個性も、遺伝生物学的に決まる部分と、胎生期の母子関係のあり方で決まるところ、その後の育てられ方によって決まるところ、と色々あると思います。そういう個性的なものによって、赤ちゃんが一人一人母親に対して示す、欲求の度合いや範囲にも差があるでしょう。

そのような、自分で解決できない不満や不安、不快感を、誰かが自分に代わって解決してくれる、自分の欲求を十分豊かにかなえてくれるという経験、これが大事なのです。それが最初の十二ヶ月、できれば、特に最初の十二ヶ月は、子どもの欲求が全て認められて、絶対的な欲求が全部叶えられる体験が必要だと思います。依存体験を十分にした子どもは自立が早い、これは自信の強い子になるからです。

幼稚園や保育園に行くと、口が中々聞けない子供とか、思うように伸び伸び振舞えない子供がいます。そういう子供は、どちらかという家庭にいるときに、自分の欲求を叶えてもらっていない子供です。これは過保護とか、甘やかしとは別のことですが、基本的に自分の欲求がよく満たされている子供の方が、本当の意味で自立心に繋がる自信はある訳です。伸びやかです。理論的に云われる最初の12ヶ月間の絶対無力な時期に、理想どおり完全な事をしてやれるというような事はないだろう、という意味でそれを補う意味でも、一年半位を絶対依存ないし完全依存の時期と考えるのが良いと思います。



子供が喜ぶことが、“幸せ”と思える育児

自立へのプロセスが順調にいかない子、情緒不安定な子、社会的行動が年齢相応に身につけていない子、こんな子供は、初期の完全無力の時期の依存体験が、不十分な子に多いといえます。それともう一つ、子どもらしくやりたいことをやらせてもらえなかった子、ということもあります。

赤ちゃんも動けるようになって、色々な事をやりたがります。例えば、^{おぼつか}覚束ない手でスプーンを持って、何とか自分で食べようとする。これは、本人は出来ると思ってやっているのです。ところが、茶碗はひっくり返す、テーブルは汚すで、お母さんは子供のスプーンを取って、自分で食べさせてしまう。子供は空腹だから、それでも食べる。しかし、本当は自分の力で食べたいのです。それをお母さんの思惑で食べさせてしまう羽目になる。

ここで育児の上手なお母さん、或は前に話した育児衝動とか、母性衝動ともいえるものが十分にあるお母さんは、スプーンで引っ掻き回すのを見ても、ニコニコ笑っている。後の始末が大変なのは解っていますが、それを少しも億劫がらない。子どもに思う存分やらせておく。そういうところが好きだし、楽しんでいっているところがある。これが素晴らしいのです。そして大事なことです。子供が満足して楽しそうな嬉しそうな顔をする。それを見てお母さんの方も嬉しく思う。こういう関係が善い親子関係だと思ふのです。

赤ちゃんがやらせてほしいと思っていることはやらせず、やって欲しくない事を一生懸命やっている。これは下手な育児といわなければなりません。このような育児行動にも、胎児期、妊娠中の問題、出産体験と言う一連の事がらが、大きな繋がりを持っていると、思えてなりません。

昔は家庭内暴力、不登校の子供などは聞くこともありませんでした。貧しくて大変な時代に、お母さん達はどのように上手に子供を育てたのだろうと考えるのです。当時は、産着や肌着やオムツなど、出産に必要

なものは全部手作りです。布地を買ってつくるにしても、色・サイズなど考えるわけですね。布地が買えない家では、何か他の衣類をつぶして作らなければならない。これまたあれこれ考える必要がある。出産の日までに、それらの物を自分の手作りで準備するわけです。縫い物をしていると、お腹の赤ちゃんが動いたりする。そんなことも屢あったでしょう。そういう風に、いつも子どもに思いを寄せるところがあったのでしょ

う。平和が長く続き、物が豊かになり、一億総中流の時代となりました。そこまで言及した買い揃えなくともこと足ります。あっそうだ、そろそろ近付いた、私ちょっと苦しいから、あなた行ってきて、と夫に頼んでも済んでしまう。それで育児ができてしまうような気がするの、今日の世の中です。出産後も、赤ちゃんは新生児室で完全に飼育される訳です。



幼児虐待はなぜ？

厄介な問題の一つに、子どもの虐待というのが多くなっています。

専門の月刊雑誌の中にも、被虐待児症候群等という特集が組まれていました。児童相談所や小児病院で、虐待による障害をうけた子供が増えているようです。虐待する親は、子どもを憎く思ったり、邪魔だと思っているのではないのです。そうではなくて、自分の思うように子どもが育たない、思うように育児ができない、その苛立ちから些細なことで虐待してしまうのです。こんなタイプのお母さんが目立つようになってきました。

大切な我が子を虐待してしまう親達は、それほどまでに自分の感情の自制が効かない。自分の日々の欲求不満が大きい訳です。自分が愛情を求めて苦しんでいるともいえます。子供に愛情を与える前に、自分が愛されたい、愛情で満たして貰いたいという思いでいる。ですから子供を虐待してしまう親を、単純に諭したり注意したりすることには、殆ど意味や効果はありません。その親自身に愛情を与えることができる人達だけが、その人を救うことができる。

単純に言えば、その親と喜びを分かち合えるようなコミュニケーションのできる人だけが、親を我が子への虐待から救い出す事が出来る、と思います。結果としては、親が我が子と人間的なコミュニケーションができるように、助けるということです。

自分の思い通りにならないことで、激しい怒りを感じる人は、わが国ではどんどん増えてきました。後に詳しく述べますが、前頭前野の機能不全の人が多くなったということにも、大きな関連があることだと思います。

周囲の人々と親しい交わりをしながらでなければ育たない人間的な感情が、家庭や地域社会の中で育ち難くなったのです。家庭の中で親子の健全な交わりが失われようとしている社会、地域社会は、地域社会における人間関係を一層失わせるでしょう。

地域社会の喪失とは、家庭内での人間関係の喪失と同じことを意味しています。子供の虐待とは、親子間での人間関係の崩壊でしょう。人間は人間関係の中で成熟や成長をしていくのですから、成熟出来ない人が増えてきたということです。

体は大人でも、心は未だ幼い子供の様な大人が多くなってきたということです。私達が夫々お互いに感じ合っている事だと思えます。人間が成熟し真の大人になり難しい国や社会になったということです。

しかしそういう社会になったという言い方は、まるで他人事のようになります。そういう社会を造ったのは自分達なのだと考えなければ、改善や解決へと努力する人はいなくなります。

重ねて申しますが、初期の依存体験というのは非常に大切です。赤ちゃんにそれを満たして上げられないお母さんは、子供がいざ自立しようと思ってあれこれやることを、足を引っ張ってだめにしてしまう。簡単に自分の気の済むようなやり方で、何でも済まそうとするのでしょうか。妊娠中に他のことを考えていても、お腹の中の胎児の体は育ちます。お産の準備も全部自分の手作りでしなくて良いので、ここの辺りの事が大きな問題なのかもしれません。

仮にそこまで上手くいかなかったとしても、次の乳児期の完全無力の時期に、自立や発達への非常に強いスプリングボードとなるような、依存体験をしっかりさせてやる事ができれば、赤ちゃんがそれを通じて、自己への自信を育むことができるわけですから、これを植えつける為に、絶対依存期を思いっきり過させてやらなければならないこととなります。赤ちゃんが泣いたら放っておかずに、何だろうと敏感になり、適切に正確に、ちっとも億劫がらずに、手を貸して上げられるようなお母さん、そういう育児者や保育者であることが大事だと考えます。

子供の欲求に的確に応える育児の手助け

こういう点から考えて、仕事を持って働いているお母さん、産休明けから赤ちゃんを乳児保育されている場合は、十分気を付けなければいけません。未だ首も据わらない産休明けの生後2ヶ月の赤ちゃんをお預かりする保育園と保育者は、このような事の意味をお母さんにもしっかりご理解を頂くことが大切です。

お母さんが仕事を持つということは、色々な意味のあることです。家庭経済の為、或は生活欲求という、親自身の社会的な自立心、関心事、人生の目標を充足させる等、多様な意味があるでしょう。経済的にしろ、情緒的にも、それを無視しては家庭生活が成り立たない意味があるでしょう。だから、それは十分尊重しなくてははいけません。

大事なものは、保育所から子供を引き取って帰ったあとの、家庭での対応です。親が疲れているかいないかなど、子供にとっては問題にすることではなく、又家庭に仕事を持ち帰ることも、同じです。肝心なのは、子供の欲求に的確に応えることができるかどうかです。幾ら疲れていても、それをやって上げる事が楽しい、嬉しくてしょうがない、一日の疲れなど、何処かへ吹っ飛んで、すぐぱっとしてやれる、それが母親として大事な資格や責任であり、又子供にとっても大事なことなのです。子供にとっては一人しかいない自分だけの親なのです。

母親の務めとしてしなければいけないからする、というのではないのです。このことは理屈で説明して簡単に納得させられる、というものではないかもしれませんが、子育ての専門家である保育園の保育士はお母さんにそういうことを日常繰り返して話し、園でもそういう見本をみせてあげることが必要だと思います。

赤ちゃんは泣くことしかできません。泣くというのは、欲求のサインです。サインがあったら、直ぐそれに応じてやらなければいけません。そういうお母さん、そういう保育者をして、子供の欲求を満たす事が出来るのです。

母親の出産体験と、新生児の母子体験のありようがもたらす育児行動への影響について、その根本は愛情です。

愛情飢餓の新生児群、母子関係障害児群の子供は、死亡率が高いとされています。これは特に、感染症に対する抵抗力が弱いようです。その後の子どもの活発な運動能力や、知識や学習能力と乳幼児期の母子関係は、重要な繋がりがあることが実証されています。そして新生児の思考力や記憶力は、恐いほど非常にはっきりしています。

詰まる所、精神と身体の成長と発達にとって、最も大切なものは愛情であるといえます。



人の脳の前頭前野の役割

MRI 技術の発達は、人間の脳の中の働きの様子が、外部から映像にしてみることができるようになり新しいことが次々に分かってきました。

人間の脳が、他の動物に比べて大きく発達しているところは、前頭前野といわれる一番前の突き出した部分です。見る、聞く、皮膚で感じる、運動する、話す、など具体的な機能については、脳のどの部位が夫々の中枢的役割を担っているか、ということは、解っていましたが、人間に特別発達している前頭前野については、長い年月、その役割の機能の意味がよくわからないままでした。

ところが、これもMRI等の技術を用いて、優れた研究が可能になりました。前頭前野

を含めた脳の機能ですが、それは最も人間的で総合的で包括的なものでした。少し具体的に云いますと、他者と、“コミュニケーション”する為の働き、そして、“想像力”や“創造力”といった、人間にとって最も高等な総合的機能を発揮する為の部位であったのです。

更に又、「衝動や感情を自制・制御する」といった、“対人関係”や“社会性”といった働きを調整し、可能にするために非常に重要な役割を担っているところでもあったのです。先にイタリアの研究として紹介した、生まれたばかりの赤ちゃんが、お母さんの話す自分の国の言葉にだけ、際立って働く新生児の脳の部位も前頭前野でした。

このように、最も人間らしい機能は、胎生期から始まって新生児の赤ちゃん時代に、既に母親との関係を通して豊かに開発され始めているのです。

子供の臨床や教育に携わっている人ならば、恐らく誰でも実感している、現代の子ども達の人間力としての「生きる力」の広範囲の衰えの意味を、私達は次に述べる研究の成果の中にも見出します。

一昨年、当園にも来園され、ご講演下さり、最近NHKの教育テレビ等でも、自らの研究成果を報告していらっしゃる東北大学の脳科学者・川島隆太氏によると、子どもが対話をする場合、内容が同じであっても、母親のすぐそばで他者とする場合と、母親と直接対話をする場合の相違を示して、前頭前野の働きが全く違うということをお教えしてくれました。子供は、内容が同じであっても、お母さんと直接話している時と、例え顔知りの人でも、母親以外の人と話をしているときでは、全くと言って良いほど脳の働き、即ち心の働きは違っているのです。

育児に抱くプラスの感情 マイナスの感情

こういう事実を教えられると、お母さんは我が子を育てる時には、自分でなければという意味で、思い切り誇りと喜びをもって欲しいと思わないではられません。

しかし、こういう育児への誇りや喜びを

母親に実感させる役割は、父親にもあるということをお強調しておきたいと思えます。それは教育心理学者もかいておられますように父親の存在感が家庭の中から消えていくと、家庭の中から本当に失われていくものは「父なるものより母なるもの」という指摘をされております。

育児に喜びや生きがいなど、肯定的な気持ちを持っている人と、反対に不安や不満など拒否的・否定的な感情を抱いている人が、様々な程度に多様な姿で確認できました。その際に確認できたことは、母親が自分の夫とのコミュニケーションに満足している人ほど、子育てに肯定的な気持ちを持ち、反対に夫との関係に不満の大きい人ほど、育児に否定的な感情を大きく抱いているということでした。

肯定的な感情とは、育児は例え大変であっても、それ以上に喜びであり、生き甲斐になっているというふうなものです。反対に否定的な気持ちとは、不安やストレスが大きく、育児中に激しい怒りや不満を感じることが屢で、子どもを産んだことを後悔しているといったようなものです。

一般に、育児に肯定的な気持ちの大きい母親ほど夫との関係ばかりでなく、自分の実家や夫の実家、近隣との関係がよいということも、明瞭な事実として浮かび上がってきました。人間は、平素から家庭の内外で周囲の人々と、出来るだけ豊かにコミュニケーションをし合いながら生きることが、精神保健を良い状態に保つことになるのだということをお、改めて知るよい機会になりました。



人と人とのコミュニケーションする事の意味

他者とよいコミュニケーションができる人は、前頭前野の働きがよく機能するように育てられ、生きてきたということです。先の川島氏も、三歳くらいまでの間に、お母さんは子供の前頭前野がよく働くように育てることの大きな意味を、脳科学者として強調されておりました。

また、東京大学の脳研究グループも、前頭前野の働きはコンピュータや携帯電話

と対話しているには活発でなく、直接人と接して対話しているときに豊かに機能しているということを解明しました。

前述のように、前頭前野を含めた脳の機能ですが、それは最も人間的で総合的で包括的なものです。少し具体的に云いますと、他者と、“コミュニケーション”する為の働き、そして、“想像力”や“創造力”といった、人間にとって最も高等な総合的機能を発揮する為の部位であったのです。

更に又、「衝動や感情を自制・制御する」といった、“対人関係”や“社会性”といった働きを調整し、可能にするために非常に重要な役割を担っているところでもあったのです。先に研究として紹介した、生まれたばかりの赤ちゃんが、お母さんの話す自分の国の言葉にだけ、際立って働く新生児の脳の部位も前頭前野でした。このように、最も人間らしい機能は、胎生期から始まって新生児の赤ちゃん時代に、既に母親との関係を通して豊かに開発され始めているのです。前頭前野が育つ胎生期、そして周産期にしっかりと愛情を与え、欲求を満たして上げる事がいかに重要であるか。前頭前野は愛情の大食漢、豊かな愛情を欲求し必要として育つのです。

不登校、引き籠もり、リストカット、拒食や過食などの摂食障害、境界性人格障害、フリーター、ニートなど、育つ時に、愛情欠乏症からくる「前頭前野発育不良症候群」に陥り、他者と生き生きと深く交わることに、ためらいや恐れを感じて苦悩する子供や若者の気持ちを考え、彼ら、彼女達への支援を考えると、その背景にあるこのような実態は、とても重要な問題といわなければなりません。

人間は誰でも他者と安心して直接コミュニケーションするように、脳の前頭前野が育てられなければ、他者と豊かに交わりをしながら生きていくことはできないのです。